

日本ラグビーのルーツ

〈慶應義塾体育会蹴球部の歩み〉

2019年9月20日から、アジア初のラグビーワールドカップが日本で開催される。日本代表が大健闘した前回イングランド大会の開催前、ワールドカップの優勝トロフィー「ウェブ・エリス・カップ」が日吉・下田地区のラグビー場で公開され、イングランドの大会組織委員会関係者やウェールズ元代表選手などが、慶應義塾体育会蹴球部を訪れた。それは慶應義塾が日本のラグビーのルーツ校だからである。

8年越しのリベンジが 蹴球部の歴史的初勝利

事の始まりは1899年の秋。当時、大学部理財科で英語講師を務めていた英国人のE・B・クラークは、気持ちの良い季節にもかかわらず無



E・B・クラークを中心にした1901年の出場メンバー

為に過ごしている学生を見てラグビーを教えようと思いついた。早速、自分と同じケンブリッジ大学で学んだ田中銀之助に通訳兼コーチとして協力してもらい、学生たちにラグビーを教えた。初めての試合はその2年後の1901



日本ラグビー蹴球発祥記念碑
(日吉・下田グラウンド)

年、横浜の外国人クラブYC&ACと対戦し、35対5のスコアで大敗した。体格や知識に大きな差があり、ラグビースパイクを着用していたのはクラークと田中の2人だけというハンディがあったが、クラークは歯がゆさから試合中に「You employ JUDO(柔道を用いよ)」と叫んだと伝えられている。その後、クラークを部長とした蹴球部は体育会に正式加盟。YC&ACに大敗してから7年を経た1908年、フォワードの「セブンステム」という独自の

戦術を考案し、見事に12対0のスコアで雪辱を果たし、歴史的な初勝利を手にすることができた。

黒黄のジャージ導人て 入部希望者が倍増!?

慶應義塾ラグビーのシンボルといえば、目にも鮮やかな黒黄のジャージだろう。蹴球部OB会もそのデザインにちなんで「黒黄会」と名付けられている。黒黄のジャージデザイナーは、1907年に卒業した岡本謙三郎(のちに大学部文学科教授)が、米国プリンストン大学のカラー「タイガー」を模して考案



1903年~1910年頃使用された最古のジャージ

第1回早慶戦で握手を
交わす両主将



したと伝えられている。なお、黒黄のジャージ以前、蹴球部員のジャージは黒一色のシンプルなデザインだったが、黒黄のジャージに変わった途端に入部希望者が倍増したという。ハイカラを好んだ塾生気質にこのデザインが大いにアピールしたようだ。

「ノーサイド」の精神から 早慶戦の熱い戦いが生まれた

初めてのラグビー早慶戦は1922年11月23日、慶應義塾・綱町グラウンドで開催され、慶應義塾が14対0で勝利。当時の「時事新報」は早稲田の善戦により「面白い試合」と伝えている。

実は1906年から1925年秋までの約19年間は、応援の過熱ぶりから野球の早慶戦が中止されていた。両校のスポーツ交流が途絶えている中、初のラグビー早慶戦の実現にあたっては、各校ラグビーOBの親睦組織A.J.R.A.が両チームの懇親会を開催するなど、円満な開催のために尽力している。こうした学校の枠を超えたラグーマン同士の結束の



日吉でのウェブ・エリス・カップの公開時(2014年5月)

数々のラグビー人材を輩出した 慶應義塾蹴球部120年

ワールドカップ日本開催の年である2019年は、蹴球部創立120年の年でもある。蹴球部を初勝利に導いた慶應義塾独自のフォワード「セブンステム」を考案した田辺九万三は、後年になって日本ラグビーフットボール協会第2代会長の要職を務めた。卒業後に日本代表選手となり、監督として蹴球部を2度の大学日本一に導いた上田昭夫など、慶應義塾蹴球部は日本ラグビーの発展に貢献した数々の人材を輩出した。近年では、山田章仁、村田毅、栗原大介

強さはラグビーというスポーツを象徴する「ノーサイド」の精神に由来しているのかもしれない。

等の蹴球部出身選手がトップリーグ選手として活躍している。

2018年シーズンは蹴球部初の医学部生の主将である古田京君がチームを率いた。全国大学選手権大会で順調に勝ち進むも、準決勝でライバル早稲田に痛恨のロスタイム逆転負け。成績としてはベスト8に終わったが、主将として、またクレバーなスタンドオフとして慶應義塾体育会が掲げる「文武両道」を体現するようなその活躍は大きな賞賛を浴び、ラグビーファンの記憶に残るものとなった。

一人の英国人教師が慶應義塾という土壌にまいたラグビーの種子は、世紀の変わり目を2度超えた今、ワールドカップという舞台で見事に開花しようとしている。



2018年シーズン蹴球部主将 古田京君